詩編 101 編の黙想（2023 年 11 月 1 日東福岡教会祈祷会奨励　松見俊）

完全な道を歩み、歩ませる

101 編はダビデの詩となっている。しかし、100 編に続き、表題は「賛歌」であり、100 編との連続性はある。

まず、一読して、「完全な道」（1 節と 6 節）という言葉が印象的である。王としてのダビデに託して「理想の王」の想いを歌ったものである。このような指導者がいたら幸いである。ルターはこの詩を「ダビデの君主鏡」と呼んだとか（メイズ）。ちなみに、昨日はハロウィンであったが、万聖節は、ルターがヴィッテンベルクの城教会の扉に、９５箇条の提題を貼り付けた日でした。

１．主に向かって、慈しみと裁き（の素晴らしさ）を歌う

詩人は「あなた」Yahweh に向かって「慈しみ」（hesed, 契約への忠実さ、慈愛）と「審き・公平な裁き」を歌うであろう、と言う。「慈しみ」と「公義・と公平な裁き」は生けるまことの神に相応しい。その神に応答して「わたし」は（王として）慈愛と公義を歌います（行います）と約束する。1 節の後半の「ほめ歌います」と翻訳されていますが、琴の伴奏付きの賛美である。主なる神の慈愛と公義、それに応答する王の愛と公義、そして、王の民衆への慈愛と公義が混然一体となっている。

２．「完全な道」を解き明かします(2 節前半)

詩人は王として「自分自身賢く振る舞うであろう。」それは、「完全な道」（欠けのない全体、健康的な状態を言う）を歩むことであると言う。その「完全な道」は神から到来するのであろうが、その道を自分は「解き明かす」は意訳である。NRSV は欠けることのない道を「研究すると」と翻訳する。人に解き明かし、教えるというより自ら研究、学ぶというのである。王は、まず自省的であり、自らの襟を正して行動すると語っている。

３．主なる神の到来を待つ（2 節後半）

「完全な道」とは正義と公義と憐れみに満ちた道ではあろうが、主ご自身の到来を待つことこそ「完全な道」なのではないか？　「いつ」あなたは、歩んでいるわたしの処に来られるのでしょうか？　主なる神がいつ来られても良いように歩き、主はまた必ず来て下さることを信じて歩む。王としての私は私の家の中を（王宮はかなり広い？）わたしの心の純真・高潔さをもって歩くであろう。また、純真、完全とは主の到来を待つこと、期待することである。人の心のあり様がまず問題であって、そこから適切な言葉や態度、行動が出て来る。

４．否定的な態度を否定する王の道（3～5 節）

純真・高潔な道を歩むことは肯定的表現であるが、3 ～5 節には否定的な態度を否定している。「卑しいことを目の前に置かず」と言い、邪悪なことを行うどころか、それを私の目の前に置くことさえもしないであろうと言う。王自身が悪に近づかないだけではなく、悪を王に近づけないように努めると言う。背く者の働きを私は（王として）憎む。それらがまつわりつかないようにする。明確な「ノー　拒絶」

である。拒絶してもくっ付いて、付着、粘着して来るなら、それも許さないという毅然、断固たる態度である。

また、「無垢」な心の反対が「曲がった心」である。そこから離れ去り、邪悪を知ることはありません、と言う。「隠れて友をそしる者（中傷する者）を滅ぼし、傲慢な目、驕る心を持つ者を許しません、（ヘブライ語原本が不明な箇所で、「私的に（密やかに）彼の隣人を中傷する者たちを、私は彼を滅ぼし、頭の高く見える者、心に誇る者を私は決して許しません、と約束している。

５．主なる神において肯定できる人たちを肯定して登用する（6 節）

この節は一転して肯定できる人を登用することを神と民衆に約束している。「わたしはこの地の信頼のおける人々に目を留め、わたしと共に座に着かせ、完全な道を歩む人を、わたしに仕えさせます。」私の両方の目は真実なもの（アーメン）の上に（注がれ），彼ら彼女らは完全な道を歩く。そして、彼（王）と共に住む。彼は仕えるはずである。 神に仕えるのか、この王に仕えるのか書かれていないが、文脈からして、この理想の王に仕えるということであろう。

６．誤登用をしない（7 節）

この王は恣意的に決して人を誤登用しない。「わたしの家においては　人を欺く者を座に着かせず偽って語る者をわたしの目の前に立たせません。」（私の家の内部に人を欺く者を住まわせず、嘘を言う者を私の視野に入れません。）肉親、近親などを登用すること、贈収賄などはあってはならないのである。

７．結語

結語もまた厳しい言葉である。「朝毎に、わたしはこの地の逆らう者を滅ぼし、悪を行う者をことごとく、主の都から絶ちます。（私は早めに（朝ごとに？）裁判あるいは政治的判断は朝早く行われたのであろう。弱い者、貧しい者への対応は、すぐ取り上げられる。この理想の王はこの地上のあらゆる邪悪な者らを破壊し、邪なことをする者らすべてをこの Yahweh の都から絶ち滅ぼす。

日本の政治家、支配層はこのような高い倫理観、その背後の信仰を持っているのであろうか？

以上の詩はハマスとイスラエルのような暴力の連鎖を正当化するために用いられてはならない。アラブ人（パレスチナ人）とユダヤ人（イスラエル人）の和解を祈り求めよう！米国でも欧州でも今回の戦闘に反対する多くのユダヤ人、モスリム、キリスト者が存在していることに光を当て、希望しよう。

理想としての王は僕となられたイエス・キリストである。キリストに従う者は単に王だけでなく、すべてのキリスト者がこのような生き方をすることを期待されているのである。理想的指導者のヴィジョンがある事は幸いである。